

釈尊絵伝

—野生司香雪画伯の世界—

平等院 住職

神居 文彰 (かみいもんしょう)

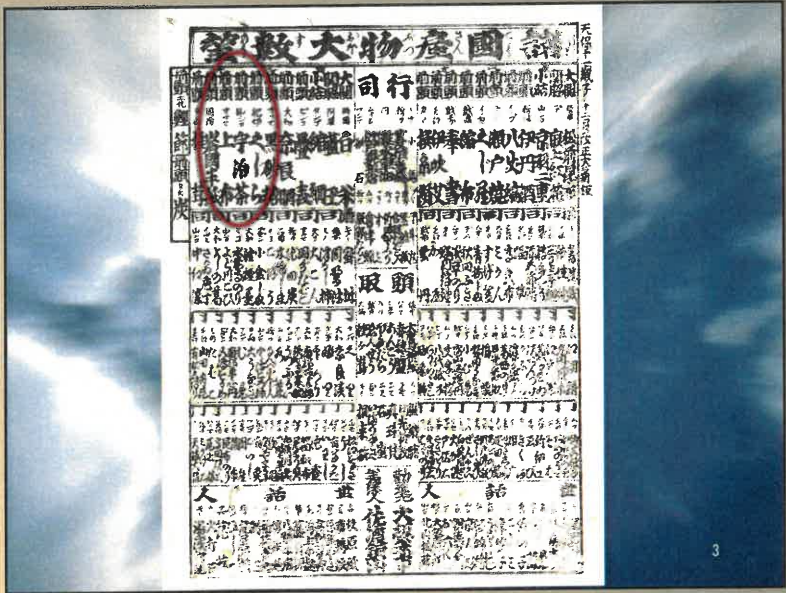
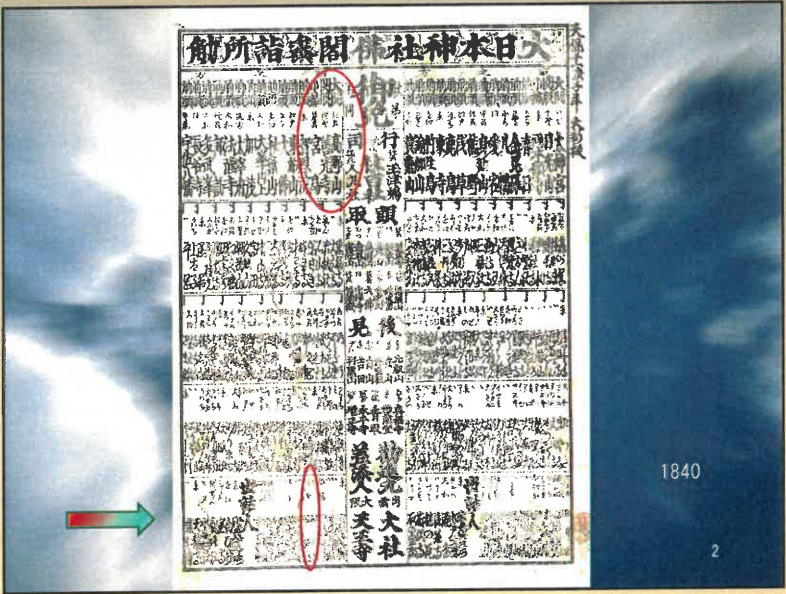
平成5年より 現職

(平成3年 大正大学大学院 博士後期課程単位修得 満期退学)

主著 「いのちの奪取り」(共著) 四鳳社刊
「臨終行儀—日本的ターミナル・ケアの原点—」(共著) 淡水社
「葬祭伝教」(共著) ハジメ社
「平等院物語 ああ良かったといえる瞬間」(単著) 四季社
「平等院鳳凰堂 よみがえる平安の色彩美」(単著) 東方出版
「新版古寺巡礼 平等院」(単著) 淡交社
「平等院王朝の美—国宝鳳凰堂の仏後壁」 別冊太陽 平凡社
「よみがえりゆく平等院」 学研ビジュアル文庫

現在 (左) 平等院 監事 (右) 埼玉工業大学 理事
元、文化庁審議官在任委員
平等院ミューアム館長(前20号)
メンタルケア協会講師 等





単なる名勝旧跡でない

古寺の口説口説く

時間の積層 物語性

おもしろい



当時の視点に立つ
香雪の想いを掬い取る
曇々霜の想いを掬い取る

7

蜘蛛の糸

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」は大正7(1918)年『赤い鳥』創刊号に掲載されて好評を得た児童文学で、翌年には中学校などの国語読本にも採用された現代の童話である。

ラストの「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする」「無慈悲な心が」と警告する芥川のことばに、仏典に仮託した西洋の思想が見え隠れすると古くから指摘されている。

実際、宗教学者であるポール・ケーラスの創作仏教説話「The Spider-Web 蜘蛛の糸」(1894)を仏教哲学者である鈴木大拙が翻訳したもの(明治31年=1898)こそ芥川に閃きを与えたという説は首肯出来る。

主人公のカンダタ(憍陀多)の救済は蜘蛛を救ったことによるが、自分だけが救われたいというエゴイズムに再び地獄へと堕ちていく。

仏典にはないこの話しの教導は、救済を示すのではなく、因果律のみを示す。

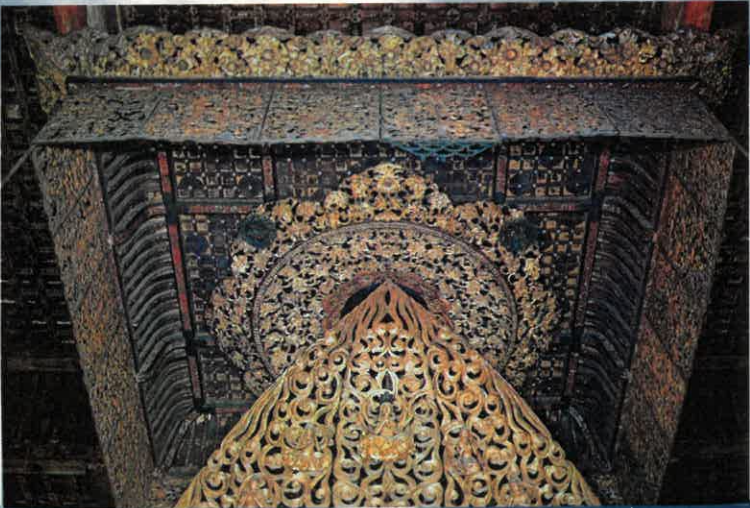
神居 文彰

8



芥川龍之介 蜘蛛の糸 日本教育紙芝居協会 S17 洞室邦画館

9



鳳凰堂 国宝天蓋

10



11



Point1. 朱線で描かれている。

→仏画を専門とする「絵仏師」は仏菩薩を
朱線で描く (⇔世俗画を専門とする絵師)

Point2. 白色下地の上に描かれている。

→天井彩色をした人=落書きをした人
=仏画を得意とする絵仏師

鳳凰堂の絵画

本来、絵仏師が手がけるはずの壁壁画(仏画)に、世俗画を専門とする絵師が深く関わっていた。

伝統や型にこだわることなく、優れた技術をもった絵師を登用。

12

壁画模写

・天心
→国の精華

・江戸期は名所旧跡の対象になっていない
養鶴徹定による『法隆寺 金堂壁画仏像記』

大正 6 年 (1917) 国華社出版 産官学連携
インド・アジャンタ石窟壁画の模写事業
荒井寛方 朝井観波 桐谷洗麟 野生司香雪 ら

「どうしても是は日本の画家の手で模写せねばならない」
瀧 精一 (T6)

山崎辨榮 安政6年1859年—大正9年1920 (M27 1894)
杉本哲郎 (S10)

13



平等院 鳳翔館 扉絵の間

壁画模写

法隆寺壁画模写 ⇒

編飼徹定 (幕末)
桜井香雲 (M21 1884)
鈴木空如 (M31 1898~)

荒井寛方 安田毅彦 前田青邨 入江波光

香雪

淑徳高等女学校 図画講師 (1914—45年まで在籍)
輪島聞声尼 (嘉永5年1852—大正9年1920)

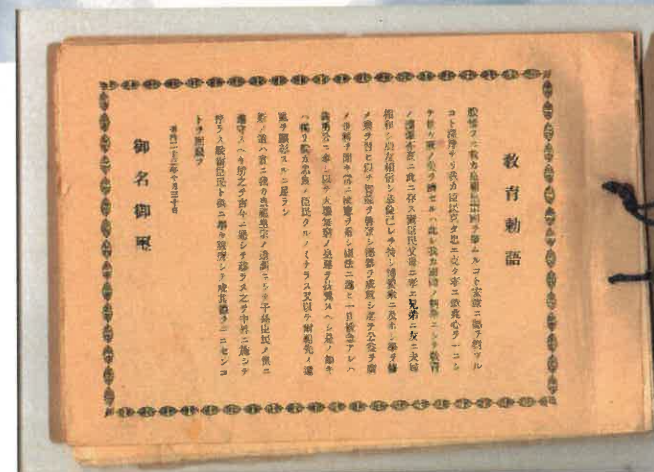
⇒ 福田行誠 (文化6年1809—明治21年1888年)

15

明治 5年3月14日 教部省
明治10年1月11日 内務省 社寺局
明治33年4月27日 内務省 神社局
宗教局



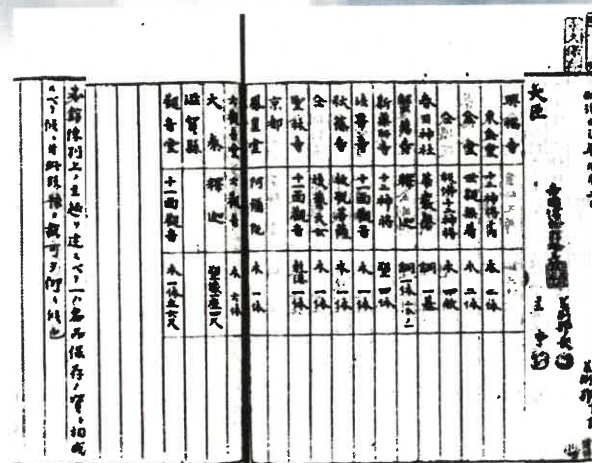
王中検査 明治 5 年



教育勅語 明治23年



岡倉天心



明治23年 天心の模写伺い

「古社寺保存の仕事は、研究を眼目としてやらねばならない、職人になってはだめだ、随って君等にやっ
て貰ふ仕事は、研究的なものでなく
てはならないのだ。」

天心

内務省 江戸以来の既存勢力の管理 維持
国民教化行政としての宗教行政

文部省 美術行政
学校教育行政 を根拠



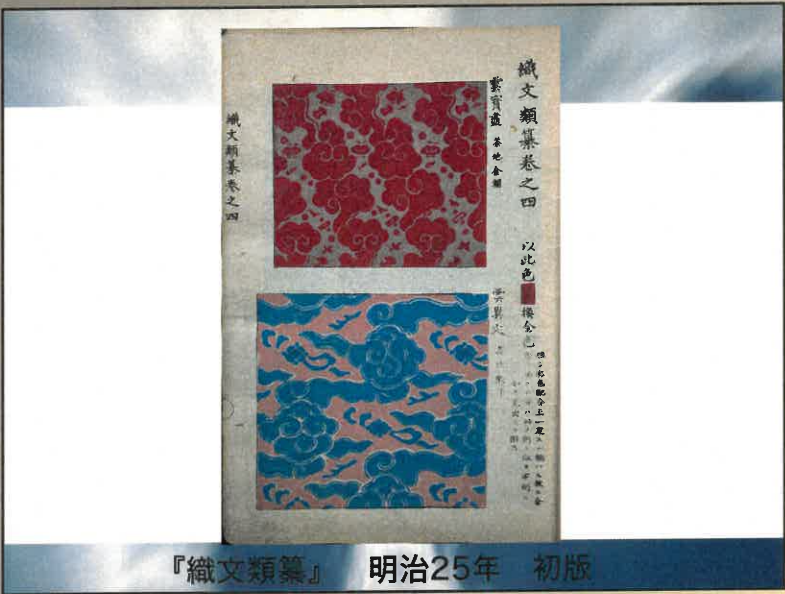
『織文類纂』 明治25年 初版



『織文類纂』 明治25年 初版



2版 M40代



『織文類纂』 明治25年 初版

明治 4年 古器旧物保存方 博物局
農商務省→宮内省
「古器舊物ヲ保全セシム」 明治4年5月23日太政官布告

明治21年 臨時全国宝物取調局

明治13年 古社寺保存金制度
内務省社寺局

明治30年 古社寺保存法

昭和 4年 国宝保存法



明治12(1879)年、印刷局初代局長 得能良介



古美術品が外へ流出していることへの懸念 印刷局製品の参考

明治 9年 工部美術学校
予科、画学科、彫刻科

明治13年 京都府画学校
文人画、大和絵、狩野派、西宗

明治22年 東京美術学校

明治35年 京都高等工芸学校

明治38年 関西美術院

明治40年 文部省美術展覧会

内国勸業博覧会 78、81、90、93、02
万国博覧会 73(ウィーン)、93(シカゴ)、00(パリ)



普通修理法

- ・ 現在遺されている造像時の良い姿を、これ以上損傷しないようにし、出来るだけ長く後世に伝える。
- ・ 制作当初の部材や彫刻面、彩色、漆箔を尊重し、これを傷つけないようにして、修理部分の仕上げは当初仕上げを生かして、出来るだけ控え目にする。
- ・ 欠損部の復元や追補は、最小限にとどめる

描くのではない
うつす

弁栄 阿弥陀 三昧仏



明治44年 1911 皇太子(大正天皇) 北海道行啓

33



明治44年 1911 皇太子(大正天皇) 北海道行啓

34



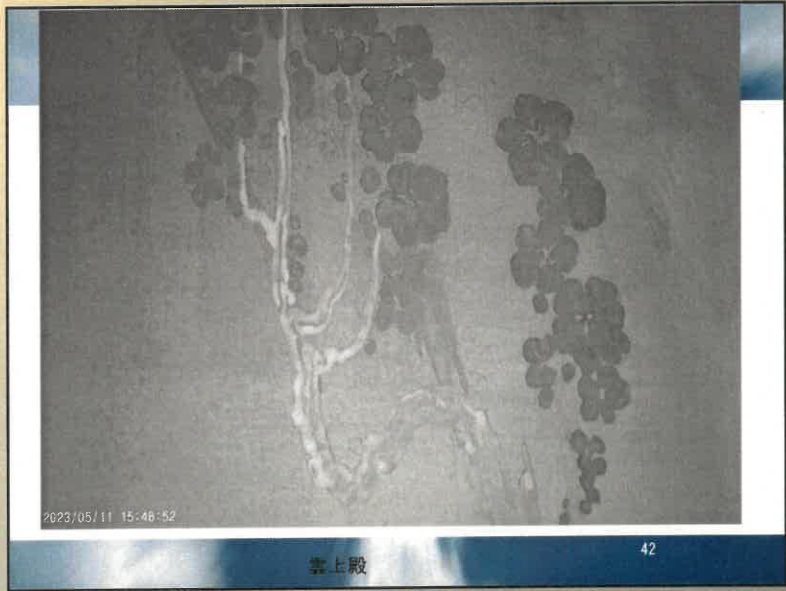
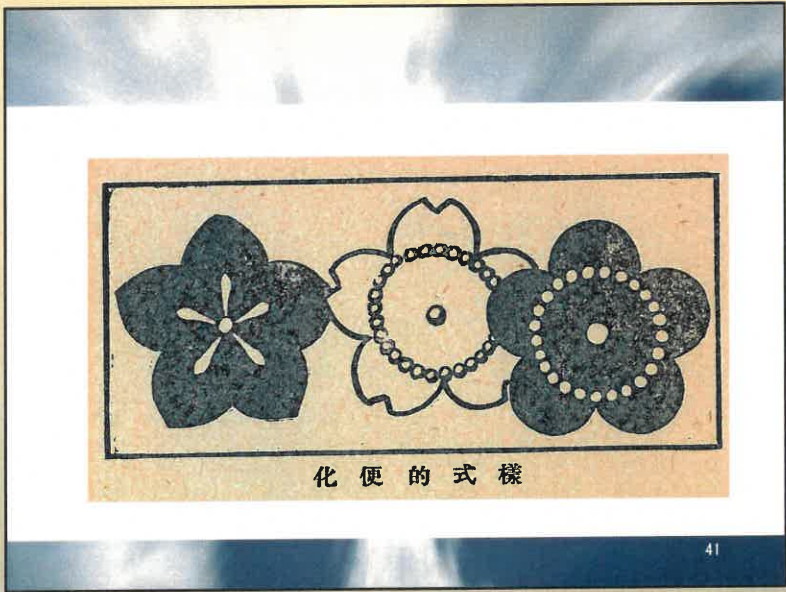
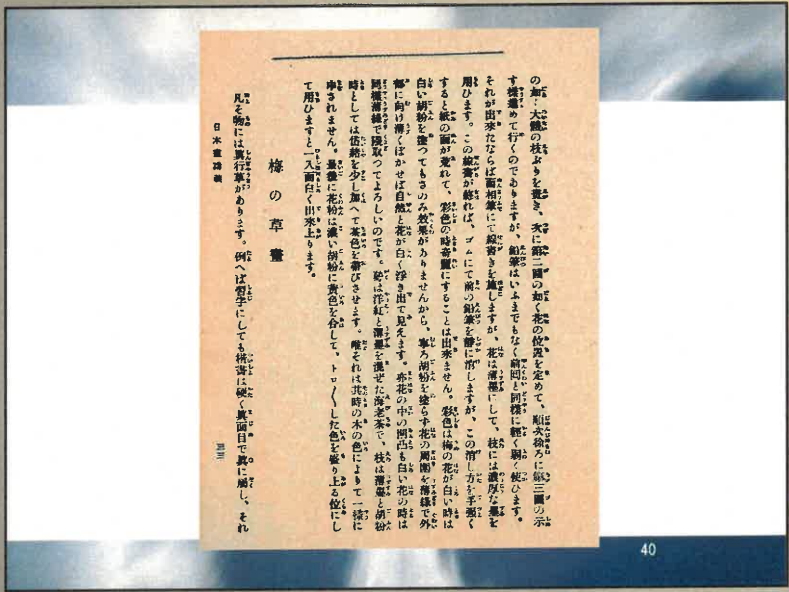
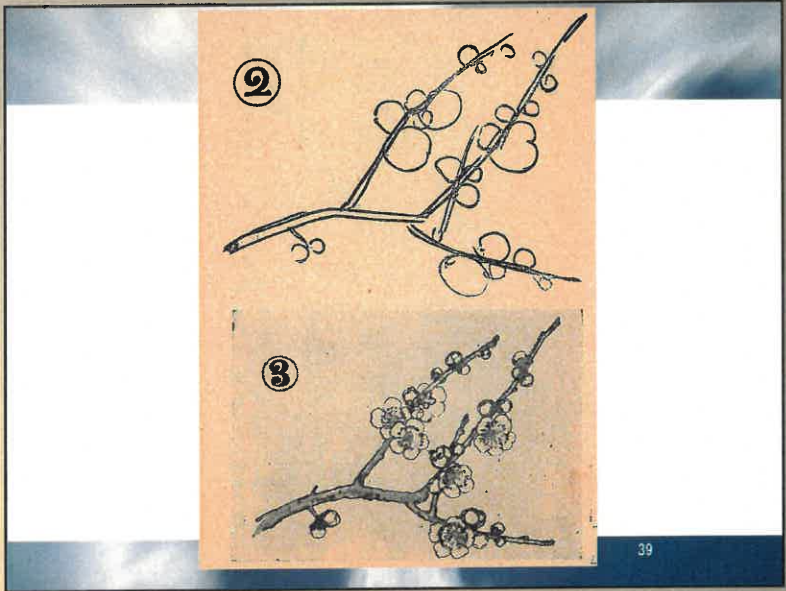
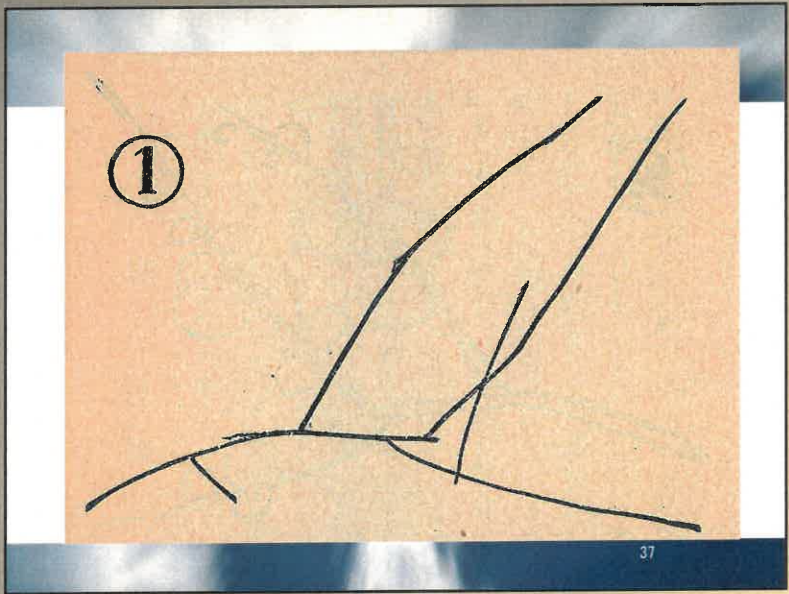
明治44年 1911 皇太子(大正天皇) 北海道行啓

35

香雪の画技の原点

—大下図を観る視点—

36





雪上殿

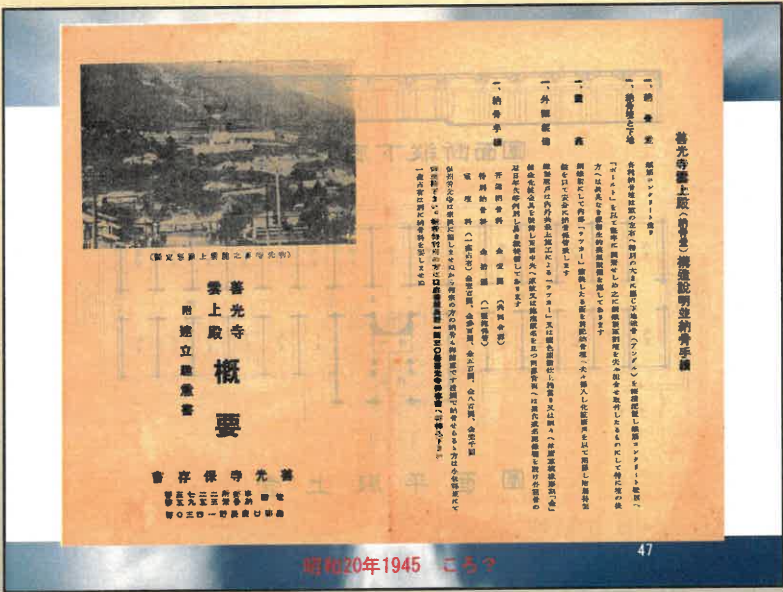
43



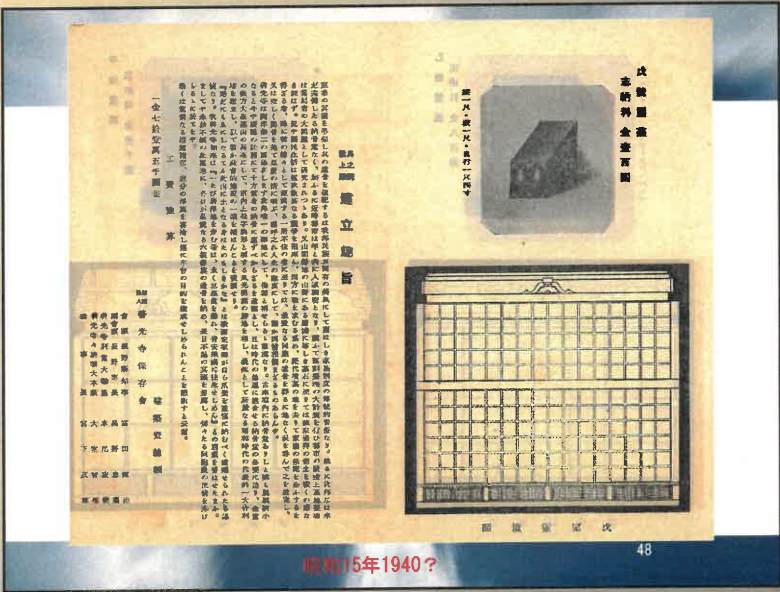
44



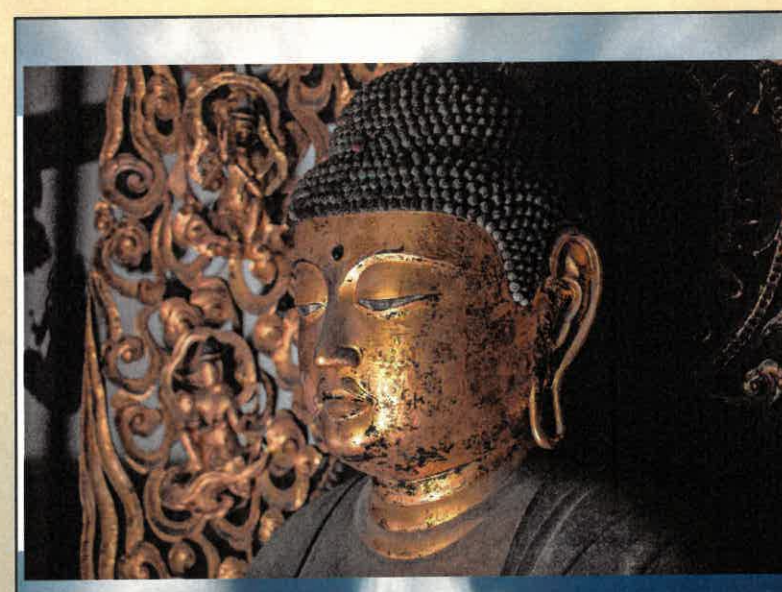
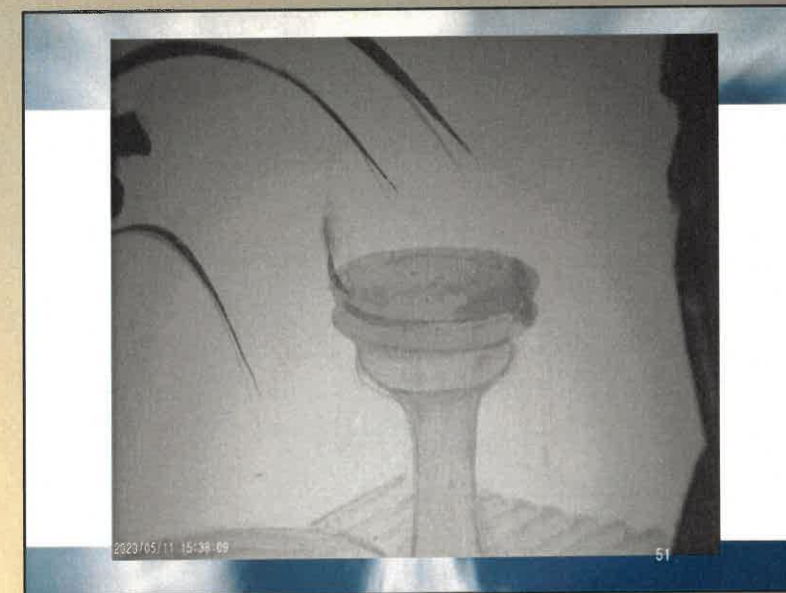
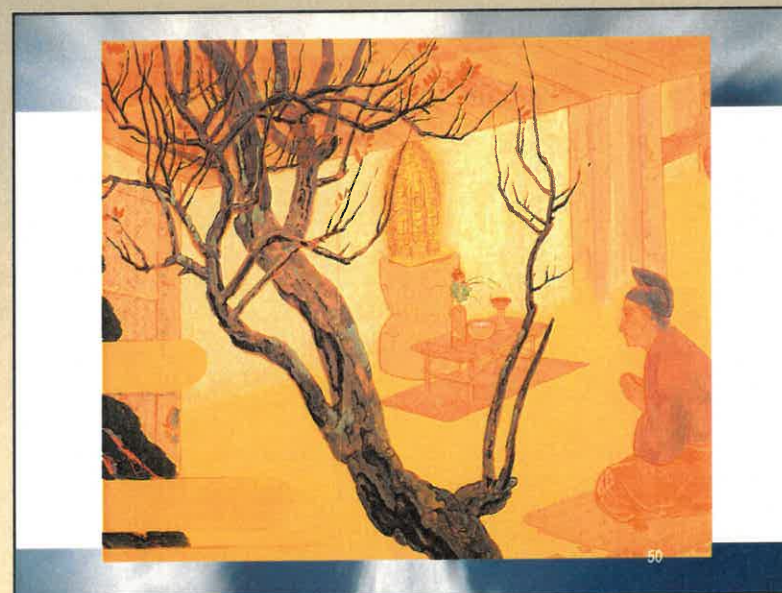
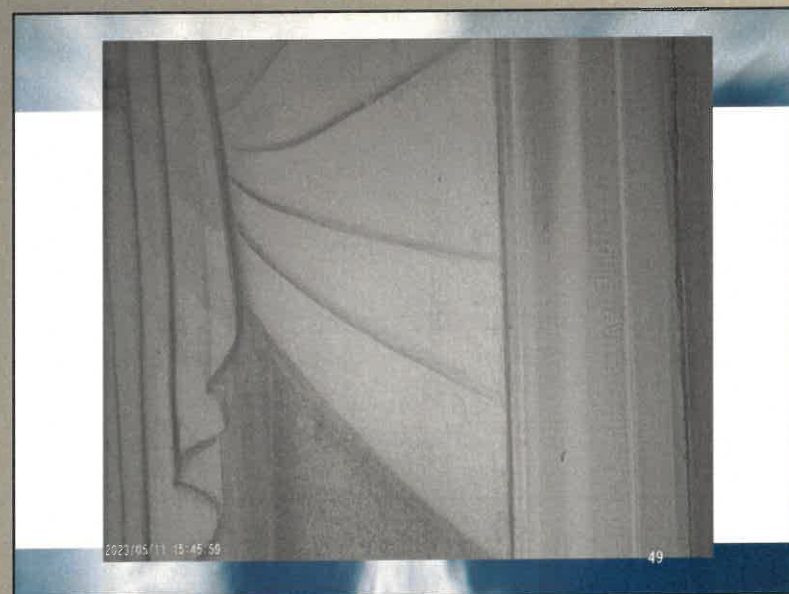
45

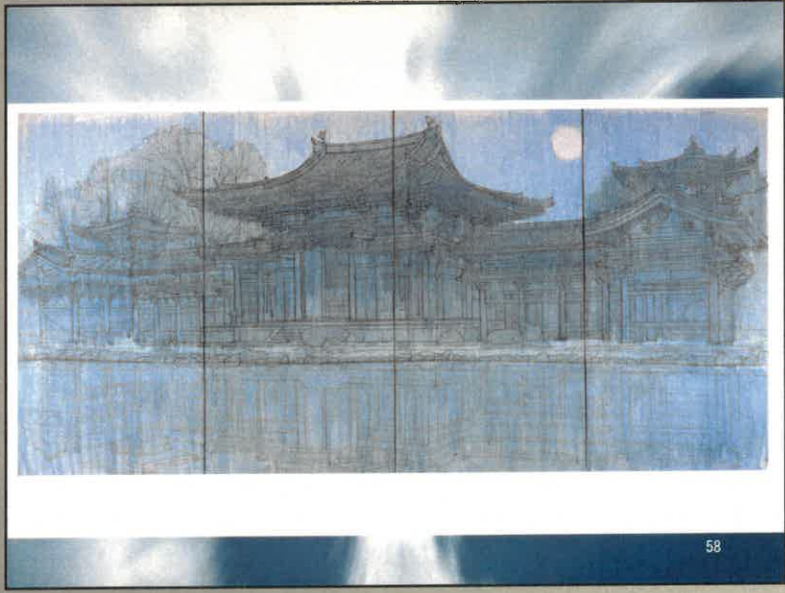
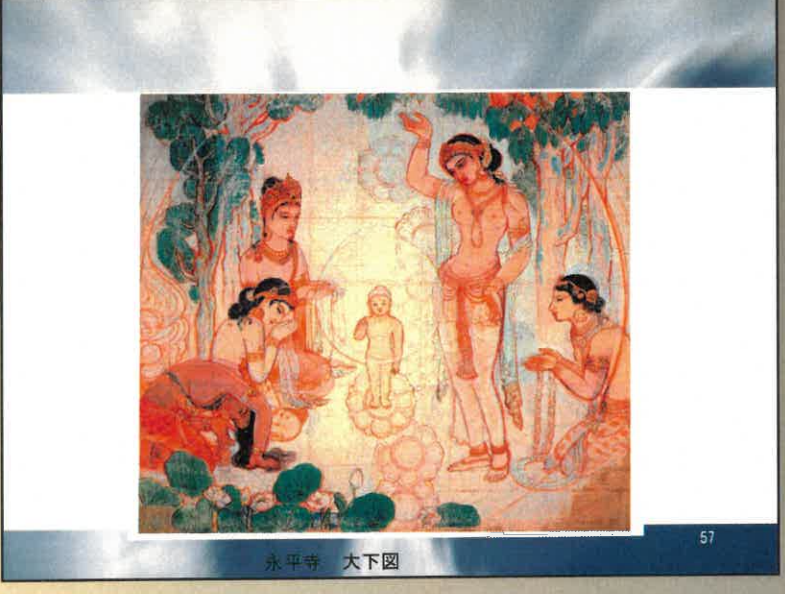
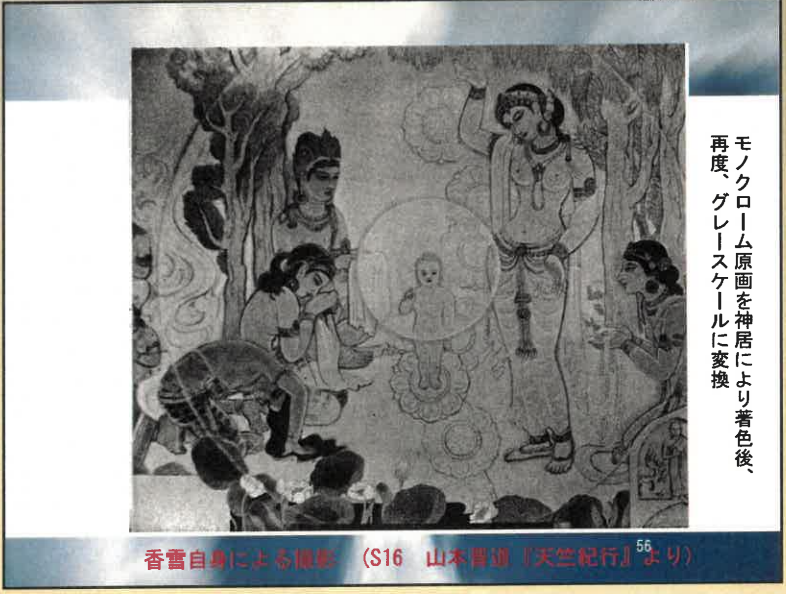


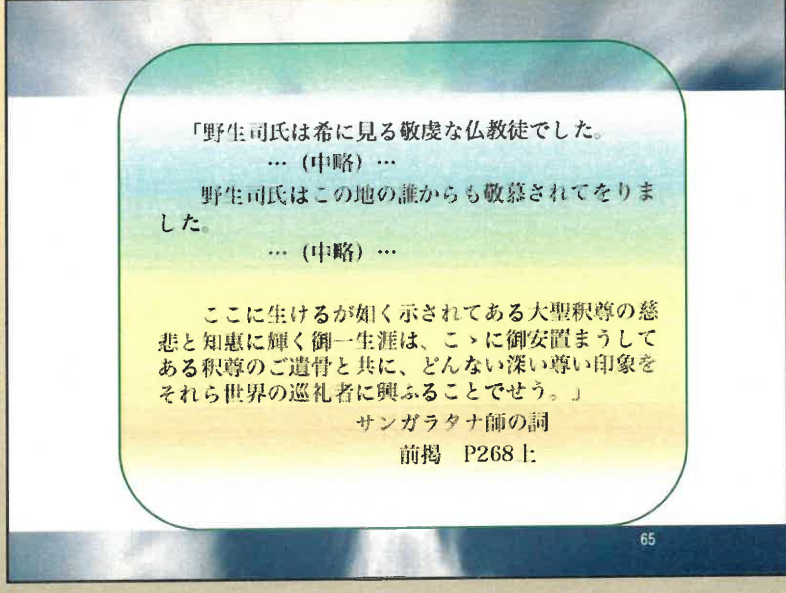
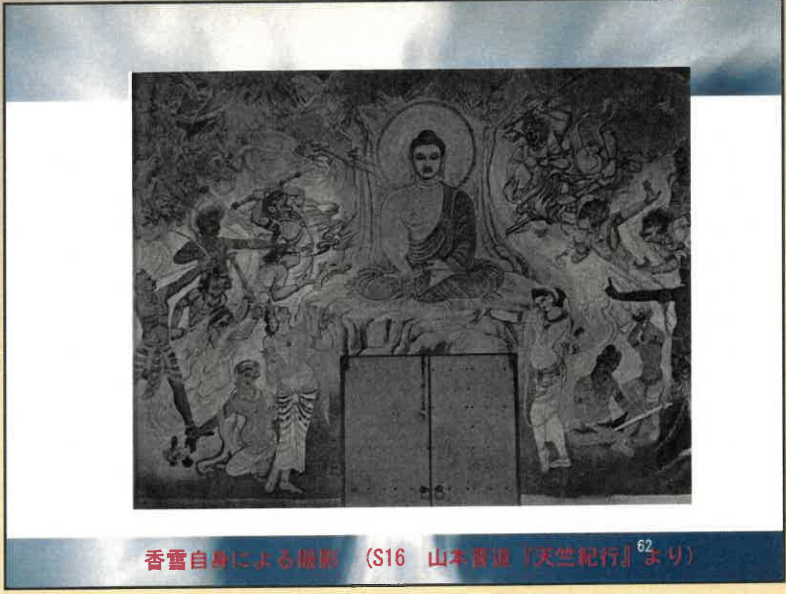
47



48







見返し図案解説

野ノ生司 香雪

混沌、現実の印度を端的に言つたならば混沌の二字に盡きる。この混沌は国家的煩悩であらうか。水濁れた「ガンデス」の流は悠久そのものである。偶々そこに神への嚮慕とて、無量数の十萬の群衆が湧き、ある行者は牛糞を焼いた灰にて、一糸纏はざる全身を化粧し、聖火を祈つて夜を徹する。一方には生鬘の山羊を、次から次へと屠つて、生々しい血を供養するものがある。その奇々怪々たる宗教作法は、三千年前の神話の時代を想わしむるもので、その了解は神人交感を目撃する、彼等のみ以て心伝心する世界で、それが雄吞中象に乘るものあり、駱駝に鞍するものあり、又猛獸を御するものあり、総じては夢かお伽南の国で、近代文化とはあまりにも縁の遠い存在であるが、科学という智慧の光を倫んだ人間は一顧すべきである。

後外箱の絵はシムラより遙みしヒマラヤ山系である。

67



小野慶太郎とともに サルサート S29

68

蓮	清浄
青	沈静
茶	暖かみ
橙	活躍の気

色の感情

配合と調和

香雪 色の性質
『早稲田高等女學講義』第18 T12

69

出会うことの
意味を問う

本来見えない世界に
色彩を見出す

記憶や経験にまで
アプローチする

70

仏伝

生涯をあらわす。

説話
絵画
彫刻
建造物
空間

印度では編年体の歴史書は皆無

71

仏伝は、一方で仏弟子の物語

仏陀の生涯 → 何のシンボルか

何を読み取るのか

今の自身の意味

今、目をそらさない

72

ガウタマ
最上の牛
優れた牛

優れに才

73
浄全2、36上

生まれを問うこと勿れ
行いを問う
なぜ、釈尊の生涯が問題となるのか

74



マヌ法典では、選ばれたカースト以外から食事を受けてはいけない。

チュンダの意味

涅槃
生身
法身(真理)
→500年

これ以降、現世では、もう仏に見えることは難しい
→他界での見仏の萌芽

75
釈尊絵伝 涅槃

ストウパー
仏陀の姿なき仏伝彫刻

BC20
仏伝彫刻の中に

BC10
仏陀の姿が強調
独立した像

三十二相

紀元前後
10 ガンダーラ
マトウラ

76

仏教伝道協会本

当初12枚(風景)を計画
→7枚に留まる
一月ずつのカレンダー形式

製作途中、脳出血を患う
治療とリハビリを繰り返しながら…
S34. 7月に筆を措く

香雪最後の大作

香雪自身の「時」を描いた(神居)
めくるといふ媒体 = 紙芝居的 物語

77



摩耶夫人のこと

夢 象 → 共有

人の誕生のためには必ず個人以外の存在が必要

時機が至るといふこと
真理のために輪廻した

サルナートのものでは菩薩らが見守る

六本の牙
→咀嚼
六波羅蜜

78
釈尊絵伝 託胎



サルナートでは蓮華の表象
梵天が金色の絹で受ける
表現もある。

より親しみやすく

供養者の反転
様々な種族

右は神聖

釈尊は誕生の「苦」(＝思い
通りにならない)を味あわ
ず、自身であらわれた

七歩 六道(輪廻)を越える

布髪(の礼は、出土品から香
雪が考案

79

釈尊絵伝 降誕



母、摩耶は、七日後に死去

80

天上天下 唯吾獨尊
今茲而往 生分已盡

全ての世界で尊いのは、ただこの世界
にいる独り一人である。
今ここに生まれ、再び生に迷うことは
ない。

解 脱

81



生まれを棄てる
19歳

選ぶ
生活か宗教か

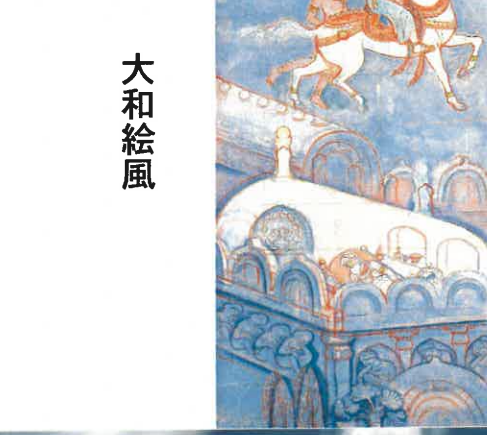
行

二苦
内苦外苦

釈尊絵伝 出城

サルナートは、空を飛ぶよう⁸²

大和絵風



吹抜屋台
斜投象的図法
連続式
離れて鑑賞
方向を持つ

サルナート



国宝 法然上人絵伝 1



国宝 扉絵

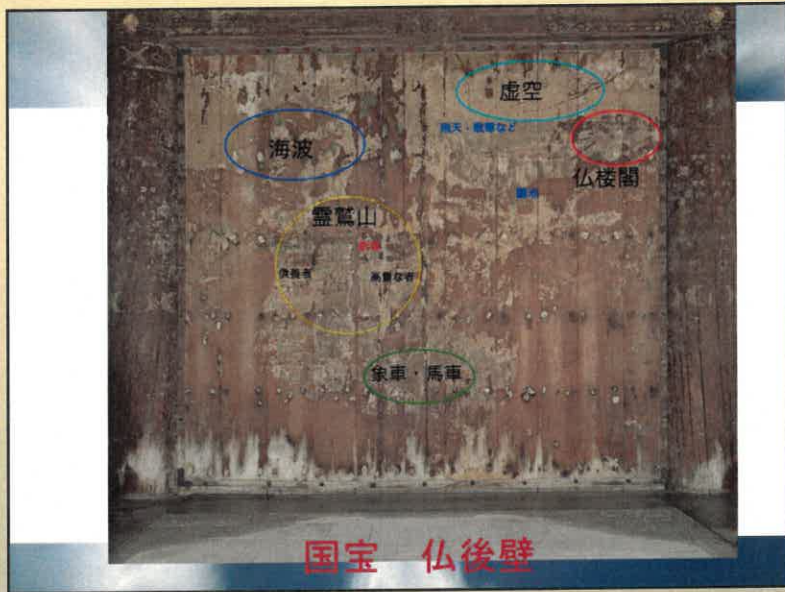


国宝 本尊阿弥陀如来坐像 国宝仏後壁

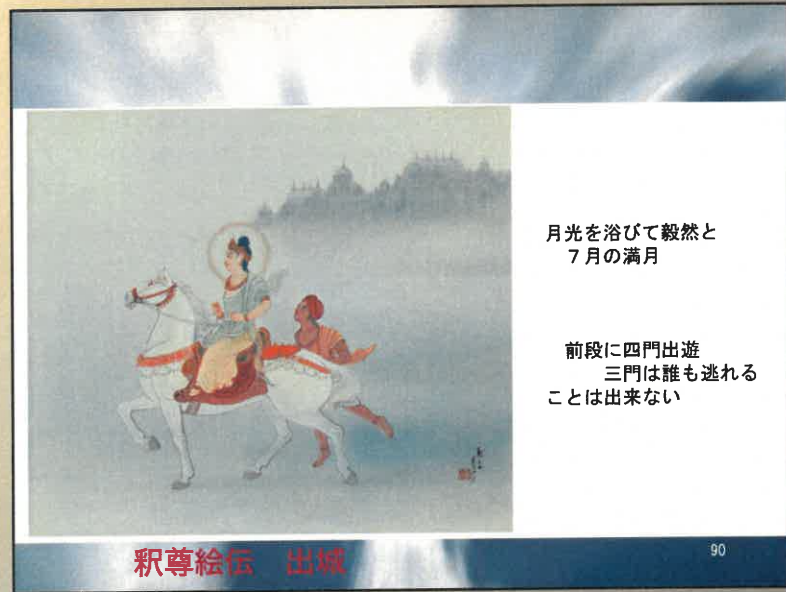


国宝 仏後壁

檜材 (H342.5 × W371.1cm)



国宝 仏後壁



釈尊絵伝 出城

月光を浴びて毅然と
7月の満月

前段に四門出遊
三門は誰も逃れる
ことは出来ない

四 住 期

学生期
家住期
林棲期
遊行期

91

出家

家出ではなく、
社会のシステムから出ていく

聖なる生活の恵み
真理の教えに導かれ
自身を自由に。

92

S36.7 7枚のうち最後に書き上げた

サルナートは白衣

様々な行を経て
悟れない目覚めない

供養を受ける
尼連禪河
菩提樹の下に坐す

乳粥 スジャータ
価値ある供養
(ブージャータ)

人生は選択の連続

釈尊絵伝 牧女の供養

93

香雪はこの画を第一に仕上げた

菩提樹
東面
禪定

魔王が絶大な妖気

兵は、
怒り 欲望 妄執
恐怖 嫌悪 名誉
など
苦しみの正体

=それらに縛られる自身

降魔の印

覚 証悟
=涅槃、解脱、気付き

釈尊絵伝 成道

94

境界の接点
人 間

どのような
結びつきを持つか

縁

95

境地を味わう

梵天勧請

悟りの体験と言語化
他者にもその状態を。

五比丘は当初修行を棄てた
釈迦を拒む(軽蔑)。

威儀

自然に座を与える

話すために来た

悟りとは何か

釈尊絵伝 転法輪

96

相手に応じて。
「三宝の成立」

中道 四諦 八正道
道の人 戒cilaの実践者

慈悲と智慧 輪廻からの解脱

97



頭北面西
満月に照らされる
聖者の無余涅槃
それでも悲しい

開眼

釈尊絵伝 涅槃

98

生じたものは、必ず滅する

必ず別れがある

今だけが絶対ではない 願望 画架

全て説き了ぬ 釈尊

法は様々な形で私達に真実の道を
照らし続ける

99



救済である。

私達の希望であり、

100

①仏 伝
何を伝えたかったのか

②どこに残っているのか
存在すること

③これから
どうしていくのか
保存とメンテナンス 精神の継承と広範



102

